

「杉 亨二 先生」胸像献花式実施要領

1 趣旨

明治12年に国勢調査の試験調査とも言うべき「甲斐国現在人別調」を実施し、「日本近代統計の祖」と称される長崎市出身の「杉 亨二（すぎ こうじ）先生」の功績をたたえるとともに、国勢調査の成功を祈念して、杉亨二先生の生誕の日である9月10日に胸像に献花を行う。

2 開催場所 ※雨天時は屋内開催

（式典・特別講演）

長崎図書館郷土資料センター 集会・研修室 長崎県長崎市立山1丁目1番51号

（献花式）

長崎公園 杉亨二先生胸像前 長崎県長崎市上西山町19

※郷土資料センターからは徒歩5分程度

3 開催日時

令和7年9月10日（水）13:30～15:30

4 式次第（現時点予定）

（1）開会

（2）功績紹介

（3）来賓紹介

（4）長崎県国勢調査実施本部長挨拶、来賓挨拶

（5）特別講演（杉由紀氏：杉亨二氏のご子孫）

～献花式会場へ移動～

（6）献花（5名程度）長崎県、総務省、杉氏、長崎市他

（7）閉会（胸像前で写真撮影）、解散

5 備考

郷土資料センターの駐車場は使用不可

杉 亨二（すぎ こうじ）は、「日本近代統計の祖」と称されています。

文政11年8月2日（1828年9月10日）肥前国長崎（現在の長崎県長崎市）で生まれる。初名「純道」。

10歳にして孤児となり、上野舶来店（時計師「上野俊之丞」）に住込奉公に入る。18歳の時、大村藩の藩医村田徹斎の書生となり、その後、22歳の時に大坂へ出て蘭学者・医者として知られる緒方洪庵の適々斎塾に入ったが病のため同年帰国。翌年には江戸に出て永代橋の信州松代藩村上英俊を手伝い仏蘭西字書蘭仏対訳「ハルマ」を編集。1852年（嘉永5年）杉田成卿（すぎた せいけい）の門に入り蘭学を学ぶ。【25歳】

1853年（嘉永6年）に勝海舟と知り合い、その私塾長となる。1855年（安政2年）には、勝海舟の推挙で老中阿部正弘の侍講（顧問）となる。翌年、阿部家側役中村勘之助の妹『きん』と結婚。【29歳】

1860年（万延元年）に江戸幕府の蕃書調所（ばんしょしらべしょ：後の「開成所」）教授手伝となり、1864年（元治元年）には開成所教授に挙用され、蘭書翻訳に関わる中で統計書に触れ統計学を志す。

1865年（慶応元年）名を「亨二」と改める。明治維新後は静岡藩に仕え、1869年（明治2年）には「駿河国人別調（するがのくに にんべつしらべ）」を実施したが藩上層部の反対で一部地域での調査と集計を行うにとどまった。

明治4年12月24日（1872年2月2日）に太政官正院政表課大主記（現在の総務省統計局長にあたる）を命じられ、ここで近代日本初の総合統計書となる「日本政表」の編成を行う。

1873年（明治6年）には森有礼らの発議により設立された啓蒙団体明六社（明六社）の結成に参加するとともに、統計学研究のための組織である表記学社や製表社（後に変遷を経て東京統計協会）を設立して後進育成を図る一方、1883年（明治16年）9月には統計院有志とともに共立統計学校を設立し自ら教授長に就任した。しかし、「統計学校」の「統計」という訳語が、スタチスチックの本来の意味を表現していないとしてよしとせず、自ら漢字を創作して使用した。

一方、現在の国勢調査にあたる全国の総人口の現在調査（当時は「現在人別調」と称した）を志し、その調査方法や問題点を把握するために1879年（明治12年）に日本における国勢調査の先駆となる「甲斐国現在人別調（かいのくに げんざい にんべつしらべ）」を実施した。

その後は政府で統計行政に携わる一方、統計専門家や統計学者の養成にも力を注いだ。

1885年（明治18年）12月、統計院大書記官を最後に官職を辞し、以後は民間にあって統計の普及に努めた。1910年（明治43年）からほとんど視力を失ったにもかかわらず、統計事業の発展にける情熱は消えることはなく、国勢調査準備委員会委員として統計学者の呉文聰（くれ あやとし）や衆議院議員の内藤守三らとともに長年の念願であった国勢調査の実現のため尽力したが、第1回の国勢調査が行われるのを見ずして1917年（大正6年）12月4日に病没した。享年90。1915年（大正4年）に勲二等瑞宝章を受く、没後従四位に叙される。